

「日本幼児保育史」研究余滴（三）



私の日本幼児保育史研究の発端

私が日本幼児保育史を研究しようと思いついたのは、今から丁度二十五年前、フレール死後百年の記念行事として「フレール百年祭記念講演会」が神戸の頌栄短期大学で開催されたときのことである。この講演会に広島大学から長田新・莊司雅子両先生が講師としてお出でになり、私も末席をけがして「フレールの教育思想と現代教育」と題する処女講演をさせていただいた。この講演会のあとで、両先生と師弟水入らずの座談会をしていたときに、長田先生から「きみ、大阪の愛珠幼稚園は日本の幼稚園教育発達史を探るための宝庫ともいえるところだ。あれほどの歴史的資料を大切にしているところは日本国中に唯一といえる。幸いにきみは大阪に近く、しかも歴史的伝統をもつ頌栄短大で、幼児

教育を勉強しようとしているのだから、ぜひ、ひまをつくって愛珠幼稚園の資料をまともあげてみてはどうか……」とすすめられたのが、私のそもそもの研究の発端となったのである。

水野浩志

そしてその後間もなく東京で、私の結婚媒酌人でもあった倉橋惣三先生を御訪問したとき、倉橋先生からも「私の書いた日本幼稚園史は東京女高師付属幼稚園を中心とした発達史で、もっと広く全国的な一般の幼稚園・保育所の幼児教育発達史を作りたいたかねて思いながらも、資料焼失のためもあって、ついに果たせなかった。愛珠幼稚園にはお茶の水の付属幼稚園にもない貴重な資料がある。そしてまた京阪神地区の幼児教育界をリードし、私の理論の実践者として活躍された望月クニさんも神戸におられることだ。ぜひ彼女の話も聞き、私の果たせなかった夢を実現してほしい」ともったいないような激励の御言葉をいただいた。当時私

は非常な感激と夢と希望にもえて、「日本幼児保育発達史の研究を私がやらずして誰がやる」とばかりに意気込んで調査計画を立て、数年にしてまとめ上げるつもりでいた。

しかし現実はきびしく、調査費も全くなく、月給八千円の中から費用を捻出したが一人でコツコツ資料をまとめ上げるのには荷が重すぎ、大変な根気と忍耐と卓越した弁別力を必要とした。

それでも約一年半愛珠幼稚園にひまを作っては通い続け、遅々とした歩みではあったが資料整理を続けていた。ところがたまたま東京に帰らざるを得ない事情ができ、研究を中断したまま昭和二十八年に頌栄短大をやめてしまった。

しかし昭和三十一年、はからずも日本保育学会の共同研究小委員の一人に私も指名され、学会の仕事として、日本幼児保育史をまとめる機会に恵まれたのである。私一人ではとてもまとめることの出来なかつた日本幼児保育史が、共同研究委員一同の見事な協力作業の下にこのたび全六巻となって完成を見るに至ったことは、本当に嬉しく、倉橋惣三先生も地下でさぞ喜ばれていることだろうと思っている。

愛珠幼稚園での思い出

私が愛珠幼稚園をはじめて訪問したのは昭和二十六年九月はじ

めのことである。長田先生や倉橋先生のお言葉もあつたため、当時の中村道子園長は、私のために普段使わない和室の貴賓室を毎週一回、早朝から夕刻まで提供して下さり、茶菓・弁当のお世話まで、約一か月半、本当に有難いことだった。資料を見せていただく中に、これは大変なものであり、資料のリストを作るだけでも相当の年月を要するもので、その資料の中から日本幼児保育発達史の中心資料を選り分けることは容易なことではないと、宝の山に入って、はじめは途方にくれてしまった。しかしまずできることから始めようと最初は単行本一冊一冊をたんに読みながら、幼児教育に直接関係のあるもの、間接的ながら非常に関係のあるもの、教職教養的なものに分類し、図書カード目録を作成し、その目録の裏に内容のあらましをメモする作業と、幼稚園関係貴重文献のコピーをとる作業を開始した。

倉橋先生の日本幼稚園史に題名だけ明らからで現存せずとか、内容不詳とされているような、関信三著の「幼稚園創立法」とか、林吾一著の「幼稚保育篇」とかの本を発見したときは、胸がワクワクし、全国におそらくこれ一冊しか現存しないのではないかと思うと、夢中でそれを写し取った。最初はみの紙にカーボン紙をはさんで二部ずつきれいに写本をした。一冊家に持ち帰っては、家内にも手伝わせて夜おそくまで写本した。絵などはガラス板の

下に電灯を入れ、きれいに写しとったりした。あの頃の苦しくも楽しかった思い出は今でも忘れられない。昔の人がよく写本して勉強したと聞いたが、その労苦をあの時程身にしみたことはない。現在では電子コピーでいとも簡単に機械が写し取る便利な世の中となったが、昭和二十六年頃では全く考えられず、何日も何時間もかかって、やっとうすっぺらな本一冊の写本ができる状態だった。あの当時写本した関信三訳の「幼稚園記」の手書きの一部は、中村園長にさし上げ、「特に貴重な文献はこのような写本にするなり、写真版にとるなり、いずれにしても現物の写しをつくり保存されるよう」お願いした。おそらく今でも愛珠幼稚園には私の手書きした「幼稚園記」がどこかに保管されていることと、思うが、それは当時の研究者の苦心例としていつまでも残しておいてほしいものだと思っている。

愛珠幼稚園には貴重な単行本ばかりではなく、未整理のままのパンフレット・資料等が大きなミカン箱に二つ、山と積まれており、これ等を一つ一つたんだ念にあたって資料、文献の総目録を作りあげるとは、今後の幼児教育発達史の研究のため一大貢献となることを中村園長にお話しすると共に、その資料整理のため専任者を公費で雇えないものか等御相談もした。またこれら貴重な資料を文献も含めて幼児文化財として文化財保護委員会で取りあ

げてもらうよう何とか働きかけ、焼失しない為の保管法をこころずることを考えねばならないなど、ずい分勝手なことをズケズケ中村園長に進言したりお願いをしたものだった。

若さと情熱に燃えていたあの当時のことを思い出すと、いろいろ中村園長に御迷惑をかけたことをすまなく思うと同時に感謝の気持ちで一杯になる。

中村園長がおやめになり、次の津村節津子園長の時に、愛珠幼稚園の文献・資料・教具類が全教職員並に中川啓史氏等の協力の下に見事に整理され印刷出版を見たことはまことに保育界のために喜ぶべきことと思っている。

保育者発掘の思い出

保育界において活躍した人々の生涯とその業績を明らかにすることは、保育史を研究する上に欠くべからざることであるが、この仕事は簡単なようで中々大変な作業であった。非常に活躍した人らしいということは分っても、その人の思想なり、業績なりが明確な資料の中に文字で書き記されていない場合、これをどのように評価すべきか非常に難しい。現実にはその世界を動かした原動力であるにもかかわらず、文書で書かれたものがないとき、歴史の上では埋もれてしまうことが多い。保育史を書く場合も例

外ではない。文書が散逸してしまつて、保育界で相当活躍され、リードした人なのに資料を発見できないままに充分その業績を掘り出し得ないで終わったものもいくつもある。保育史研究の仕事に従事してつくづく思ったことは、たとえめんどうでも各園の創設事情、沿革史はみな作っておくべきであり、保育者の遭遇した苦しみ、悩みはできるだけ記録にとどめておくこと、またひまをみて自叙伝を書いておくことが後世の人に役立つものだということがある。

私が担当した保育者の発掘作業で苦勞したこと、失敗したことも、嬉しかったことなど思い出すままに次に記してみよう。

まずはじめに苦しい思い出として心に残っているのは、倉橋惣三先生に、神戸にいる間に、またお元気な中に是非望月クニ先生にお会いして生証人としてのお話をいろいろ伺うようにといわれ、心にかけていながらもついに機会を失して、いよいよ保育史執筆の話がきまつてから、望月クニ先生を神戸のおすまいに訪問したときには、もう先生は御他界されたあつた。このことはまことに残念で、私の引込思案と仕事ののろさのためで、非常に後悔した。このことは東京保母伝習所の創設者である石原キク先生についてもいえる。一度学校を御尋ねしてお話を伺い、そのすばらしい御人格と幅広い御活躍の数々に敬服させられたが、先生御自

身の書かれたものは何もない。資料といつても皆戦災で焼失してしまつたといわれ、次の機会に、ゆっくり口述記録をとりながら、でも先生の生涯と業績をまとめさせていただこうと思ひながら、現実の仕事に追われぐずぐずしている中に先生は御他界あそばされ、遂に手つかずで終つてしまつた。これも本心に心残りのことであつた。

大正期に律動遊戯を全国の幼稚園に普及された土川五郎先生については、御遺族はほとんどなく、やつと探してた御令息の末亡人も、先生の生まれや御履歴の詳しいことは何も御存じなく、「亡父はそんなに偉い人だつたのですか、ちつとも知らなかつた……」といわれる始末で、先生の生涯と業績を調べる作業も非常に苦勞した。先生がお勤めになられたらしい都内の古い小学校を尋ね歩き、麴町小学校の古い職員録の中に土川五郎先生の履歴書を発見した時は、涙が出る程嬉しかつた。何日も貴重な時間を浪費して、やつと土川先生の履歴書一枚を発見したにすぎない。全くこの忙しい時代に思かなことだと思われるが、考古学者の発掘と同じ発見の喜びを味わつたものである。

西村真琴先生については私が広島文理大の学生時代、研究室にフレイベルと子どもたちの遊び戯れている様子をえがいた大きな油絵がかかげられていて、それは西村真琴という、生物学者が長

田先生におくられたものだと言われていた。したがって名前は知っていたが、詳しいことは何も知らなかった。また私が勤務した頌栄短期大学に生物学の非常勤講師としてお出でになっており、時々お会いしていたのだけでも、その先生がわが国保育史上特筆すべき多大の貢献をされた方だとは全く知らなかった。いろいろ保育史の調査を進めていく中に先生の業績の数々が明らかになり、何故もっと先生の生前に多くの貴重なお話を伺っておかなかったかと悔やまれたことである。

西村真琴先生の御令息が俳優西村晃氏であることを知り、はじめて映画俳優のお宅を訪問し、いろいろ資料をお借りしてきたが、真琴先生の著作物を読めば読む程、その雄大にして該博な思想・教養の深さに驚嘆した。哲学博士・理学博士であって、文筆家であり、かつ画伯でもあった彼が、最後にゆきついたところは幼児教育の振興ということだった。一切の榮譽と栄職をすて民間の保育事業の発展のために全力を傾注した西村真琴先生の思想と業績についてはもっと深く調べる必要があると思っている。

不思議な縁

私にとっては日本幼児保育史研究は、不思議な縁によって結ばれているという感じがする。私が小さいときに通った幼稚園は、

土川五郎先生が大正十二年に大井町に創設された瑞穂幼稚園で、私はその最初の頃の園児だった。土川五郎氏の創作遊戯・律動遊戯を日比谷公会堂その他でいろいろ披露うさせられた園児の一人が、保育史上の偉大な人物としてかつての園長の生涯と業績をまとめることになろうとは夢にも思わなかった。

また私が保育史執筆中、たまたま亡父の書齋を整理したところ、父が広島高等師範学校研究科生時代に執筆した「幼稚園研究」という部厚い原稿が見つかった。これは私の父が明治末期に幼児教育に関心を持ち、当時の関係文献を読みあさり、幼稚園無用論に対抗するため、当時の幼稚園の教育効果測定を思いついた、全国的な調査研究を実施し、これを心理学的に詳細に分析評価したものである。この調査結果を含め、幼稚園教育論をまとめ、小西重直教授の校閲の下に出版直前にして渡米したため、原稿のまま箱に納められていたものである。父が幼児教育にこのような関心をよせていたとは全然知らなかった。親不孝のこの身を恥じたのであるが、父の原稿の一部は「大正初期における保育効果の研究」として、日本幼児保育史第三巻に掲載することにした。父の埋もれた研究の一部を公表することを通して、地下の亡父を喜ばすことになったのも不思議な縁といえるだろう。

その他、私の学生時代の「フレイベル研究」が機縁で、フレイベ

ル主義保育のメッカといわれる頌栄短期大学に奉職し、エー・エル・ハウ先生の偉大な業績と先生の集められた多くのアメリカの幼児教育文献の宝庫に接する機会に恵まれたことなど……みな不思議な縁となつて私の保育史研究に多大の影響を与えてくれたことを心から有難く思うとともに、人間の出会いの大切さと人間の縁の不思議さとしみじみと感じている。

執筆後の反省

私はこの共同研究において主たる分担領域は保姆養成と保育会ということになつたのであるが、この方面については明治期頃のものも多少資料もあり、自信もあつたが、大正期以降については皆目見当もつかなかつた。暗中摸索しながらも手当り次第古い資料をあさっていく中に、いつしか骨組みや全体の見通しが出来、必要資料が発見され、やつとまとめ上げることができたというのがいつわらざるところだつた。そして何でこのような領域分担を引受けてしまったのかと後悔することがしばしばだつた。しかし研究調査を進めるにつれ、保育界の動向や活躍した人々の業績思想を知り、とてもよい勉強になつたと今では感謝の気持で一杯である。

しかしながら分散してしまつた資料を集め、重要な事項をもれ

なく、客観的に評価しつつまとめ上げるといふことは容易な仕事ではなかつた。自分では正しく、客観的資料に基づいてまとめたりつもりでも、後で誤りや記載もれを指摘されたところもいくつがある。特に山下俊郎先生から戦後の保育者再教育講座のさがげとして愛育会主催のものが今一つ抜けていると御指摘を受けたことは非常に痛かつた。このことも含めて、今までに客観的に誤りと分つたこと、発見された新事実等々を追補としてできるだけ早い機会にまとめて出したいと思つている。

まだ外にもいろいろ思い出は尽きないが、割り当てられた紙数も尽きたので、共通した苦勞話は他にゆずり、これで筆をおこう。

(東京都立立川短期大学)

